

銀のライター

松下 幹生

いつもの喫茶 いつもの席へ
いつものあの娘が 寄ってくる
オーダーを取り 離れゆく
ライターの 炎の向こう
あの娘の笑顔 揺れている
あの娘と話 してみたい
あれは昭和も 終わり頃

いつものセブン いつもの一服
いつもの紫煙の 向こう側
可愛い君に 想い寄せ
銀色の ライターそっと
机に置いて 店を出る
あの娘がきっと 忘れ物
気付いてくれる はずだから

いつもの喫茶 いつもの席へ
いつものあの娘が 寄ってきて
忘れ物だと 差し出した
ありがとう 言うのがやっと
会話の接ぎ穂 みつからず
うつむく俺は 意気地なし
あれは昭和の 秋の事